

SHUHEI'S PROFILE

1993年生まれ。兵庫県出身。2011年「もし高校野球で女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら」で映画デビュー。その後「天国からのエール」「らもトリップ」「スープ〜生まれ変わりの物語〜」「江ノ島プリズム」「男子高校生の日常」と数々の作品に出演。2014年は「パズル」「クジラのいた夏」「日々ロック」と主演作が立て続けに公開され、TVドラマではCX「僕のいた時間」「若者たち2014」に出演など、今注目の若手俳優。

Shuhei was born in 1993 in Hyogo. He made his debut with the movie *Moshi Kōkō Yakyū no Joshi Manager ga Drucker no "Management" o Yondara*, and continued his acting career with *A Yell from Heaven*, *Ramo Trip, Supu: Umarekawari no Monogatari*, *Enoshima Prism* and *Daily Lives of High School Boys*. Last year he played a leading role in the movies *Puzzle*, *Kujira no Ita Natsu* and *Hibi Rock*, as well as the TV series *CX Boku no Ita Jikan* and *Wakamonotachi 2014*. He is seen as one of the hottest young actors currently working in Japan.

運動神経がすごくぶるいい人だ。映画「愛を積みむひと」で見た石を運ぶ動きと石堀作りは、まるで本物の職人のようであり、バイクに乗って北海道の大地を疾走する姿がこれもまたそこに住む若者のように風景に馴染んでいる。

石堀作りは専門の職人さんから指導を受けたのだそう。「やるうちに、ちょっとずつ上達していきましたね、石の運び方、石の割り方、それから石の形を見て積むとか、ということをやわりながら」

この映画では無口で無愛想だけど、しっかりとハートを受け止めることのできる少年を演じて観る人にその存在感を印象つける。21歳の野村周平さんは、TVドラマ、映画、舞台とそのフィールドを忙しく駆け回り今最も注目され、監督の方々に愛される若手俳優のひとりである。前作「日々ロック」のハチャメチャなヒーロー、そして今回の屈折した心を持つ少年、実際の彼はそのどちらに近いのだろうか。

か。「どっちにも近くないですね、その中間地点かな。なんか、いろんな人がいるんですけど、自分の中に。無愛想なときもあるけど、自分のいいときもあって、すごく大人のときもある。あれはすごく子供のときもあるし、自分の性格がよくわからないですね」という。多分彼の中のいろんな人が、違う作品のそれぞれのキャラクターにフィットするのだろう。しかもすごく自然に演ずるといって才能をもって、今回共演したこの映画の主役である佐藤浩市さんからは、カメラを意識するな、自分の考えた気持ちで動け、というアドバイスがあったという。周りの伝説的な先輩俳優たちから教えられる様々な演技のエッセンス、作品との向き合い方、若い野村さんが時折見せるハツとするほどマチュアな雰囲気は、こんなところから培われているのかもしれない。でも相手役の杉咲さんとのシーンはなかなか苦戦した様子。「妹みたいな感じで、全然彼女(役)として見れなくて、スゴイ天然で、スゴイ

かわいらしいから、子供を扱うように扱っちゃったりする感じを出さずにするっていうか、結構難しかったです(笑)」

忘れられない旅は数年前TVの旅番組の案内役で訪れたチリのアタカマ砂漠、きれいな星を見に行く旅でスゴク楽しかった。休みが取れたら是非行きたいのはカリフォルニア。「カリフォルニアの文化がスキなんです。サーフィン、スケボーや車のレースなんかも見たいですね。2週間休みがあればいいんですけど、いつ取れるんですかね(笑)」

共演された俳優たちや監督ともいい関係が築けて、北海道という素晴らしい自然の中で撮影できたのはとても良かったと振り返る野村さん。そして最後に「この映画自体がスキです。人と人との温かさを忠実に伝えていくところが、それを次の世代に繋げていくというのがテーマになっているので、そんなところを感じ取って観ていただきたいですね」と優しく語った。



無口で無愛想な少年役で見た俳優のイメージが好評。主演の佐藤浩市さん、杉咲花さんとのシーン(下)

SHUHEI NOMURA

WORDS NAHOKO KODAMA

「自分の中に いろんな人がいる」

6月20日公開映画「愛を積みむひと」に出演。若さの中に潜ませるマチュアな精神でTVはもとより映画界、演劇界からも熱い視線を集める野村さんが語る出演作のこと。



監督&共演者

朝原監督: 自分の生きてきたこれまで、そしてこれから思いを巡らせたり、もう亡くなってしまった人のことをふと思い出したり、若い人たちの輝きがとても眩しく貴重に感じたり、そんなことの多くなった世代の方々にご覧いただければと思います。



佐藤さん: 三國と一緒にやってきたスタッフが多いので、みんな僕の後ろに三國を見るだろうし、逆に言うと僕は朝原さん含めて、スタッフの後ろにまた三國を見る。そんな、普段なかなか無い相関性がありました。



樋口さん: 命の時間が長くないと知った妻は、残された時間をどう夫と過ごすのだろうか？ 自分のため、夫のため、娘のため、何をしたいのだろうか？ その答えは、映画を見た人たちからいろいろと聞いてみたい。



愛を積むひと

佐藤浩市 樋口可南子
北川景子 野村周平 杉咲花
吉田羊 柄本明
監督・脚本：朝原雄三
原作：「石を積むひと」
エドワード・ムーニーJr
6月20日（土）全国公開



撮影は北海道の美瑛町、1年かけて美しい四季を追った（右上・左中）。テーマとなる石塀はシーンごとに造られた（中央）。登場する美瑛産食材の料理も重要なポイント（右中）。

©2015「愛を積むひと」製作委員会

愛を積むひと

この映画を観たらきっと美瑛を訪れたい。トスカーナかプロヴァンスかと思ふ丘の風景は「日本で最も美しい村」第1号に認定された北海道美瑛町。ああ、日本には北海道という素晴らしい自然の宝庫があったのだ、と改めて感じ入るのは、きっとその自然に癒され励まされ、魂の再生を促される映画のストーリーの根幹を担っているからだろう。原作はエドワード・ムーニー・Jr 著「石を積むひと」。舞台をアメリカから北海道に移して映画化された「愛を積むひと」は、しかしオリジナリティに溢れる新しい物語である。日本人の繊細な心の動き、愛情の表現、浄化されていく精神（こころ）の疲弊、今を生きる日本人誰もがこの映画の中の誰かになぞらえてしまうのではないだろうか。

第二の人生を大自然に包まれた美しい土地で豊かに過ごそうと、東京下町の工場をたたみ、北海道に移り住むことにした夫婦、篤史と良子。以前外国人が住んでい

たという瀟洒な家を手に入れ、良子は野菜やガーデン作り、家の内装のアレンジなどささやかながらも豊かな生活を満喫していた。一方、仕事人間から仕事なくなった途端、毎日手持ち無沙汰で暇を持て余す篤史。見かねた良子は、長年の憧れでもあった家の周りの石塀作りを篤史に頼む。

不器用で無愛想な夫篤史役に佐藤浩市さん、どこまでも優しく美しく凛とした妻良子役に樋口可南子さん、そして石塀作りを手伝う少年徹（野村周平さん）とその恋人紗英（杉咲花さん）たちが紡ぐ生と死と愛を、ひとひらひとひらすくい上げるようなタッチで描く朝原雄三監督の感性が、すんなりと心のひだにフィットしていく。普通の人々の人生は、ただドラマチックで、悲しみを乗り越える強さを誰もが持ち合わせている、と気づかせてくれる。ラベンダーの丘が、ひまわりに変わり、紅葉の山を経て雪景色に変わる美瑛の風景は息をのむほど美しい。「愛を積むひと」、この夏おすすめの映画です。

